

『鬼哭』

著作 a s h

この作品は『痕』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.2）を元にした創作です。

一、対峙するもの

男は暗い山道を疾走していた。

周りに明かりらしい灯りはない。

ただ月だけがかすかに、男の周りの線を浮かび上がらせる。

そして、男の先にもう一つの影があった。

男はその影を追っているのだ。だが、不思議なことに、男もその影も灯りなどを一切持

たずに山道を走っていた。

不意にひらけた場所に出た時、月がその二つの影を照らし出した。

一つは追う男の姿。

もう一つは……人ではなかった。

そして、その人でない異形のものが、ふと立ち止まる。

追っていた男も、その場で立ち止まる。

男は異形のものをじっと見つめて、告げた。

「お前にとっては俺のことなど、単なる獲物でしかないだろうが、この手でお前を楽にさ

『鬼哭』

せることが……親としてのせめてもの情けだ」

対峙したまま、その異形のもものは動こうとせず、男が言った言葉も理解してるのかすら、分らない。

だが、その異形のももの瞳には、男に対する殺意ともう一つの感情が表れていた。歎息。

これから始まるであろう死闘に対する期待。

それまでは味わうことの叶わなかった充実感。

この男が相手ならばそれまでとは違い、存分に狩りを楽しめる。

異形のももの感情を読み取ったのか、男は一層敵しい表情で告げた。

「まさかこんな形でお前とやりあうとは思ってもみなかった。だが、これも宿命。俺がエディフェルに貰った命のすべてを賭して、お前を殺す」

一瞬、異形のもものが表情を変えた。

そこにあつたのは恍惚の笑み。

そして、異形のもものは大きく膝をまげ、一呼吸置いたのち、力強く地を蹴った。

瞬きもせぬうちに、異形のもものは男の目の前に来ていた。そして、その大きな爪を振りかざす。だが、男は動こうとしなかった。いや、たとえ優れた剣客であっても、異形のももの動きについて行くことは叶わなかったらう。

だが、爪が男の頭に向かって振り下ろされた時、異変が起きた。

爪は男の頭蓋をつぶすことなく、また胸をえぐり出すこともなかった。

男はほんのわずかの間に、その爪を避けて後ろに飛んでいたのだ。

『鬼哭』

異形のもものが男の姿を追う。

しかし、その先にいるのは人ではなかった。

人間よりも遙かに強く逞しい肉体を持ち、狩獵者として君臨すべき存在。

そこには、自分と同じく　鬼の姿があつた。

これこそ最高の狩りの獲物に違いない。そんな歡喜に鬼が吠える。その咆哮は周囲の木々をも戦慄させ、その様は若く猛々しい獣のようであつた。

それに呼応するかのごとく、先ほどまで男の姿をしていたもう一匹の鬼も吠える。だが、それは雄叫びと言うより、どこかに哀しみを帯びていた。まるで死に行くものを送るよう
に。

そして、鬼同士による死闘が始まった…。

二、宿命を負うもの

次郎衛門の妻であり二児の母親であるリネットが、長男のことを夫に相談したのはかなり前のことだった。

次男から言われたことであり、リネット自身はあまり感じていなかったのだが、長男の様子が最近おかしいと言うのである。

次郎衛門にしてみれば、子供とは言え元服してもおかしくない年齢だ。色々と思うことがあるのだらうと思っていた。まず何と言っても、リネットは人間の子育ては初めてで氣遣いすぎる嫌いがあった。

それに長男と次男は見事に対極をなしており、次郎衛門はおとなしすぎる次男よりも、活発な長男を氣に入っていた。

また、エルクウの力も長男の方が強く出ており、次郎衛門とも引けを取らないほどであった。つまり、長男が性格から能力までが父親似であったのに対し次男はおおむね母親似だと言える。だが、兄弟仲は父親や母親の想いとは無関係のようで、至って仲のよい兄弟だった。お互いによき遊び相手として、いつも一緒に出掛けてりしていた。

そんなわけで、次郎衛門はその時リネットに言われたことをあまり氣にはいかなかった。むしろ、エルクウの力、特に肉体的能力に劣る次男をどうにか鍛え上げようと頭を悩ませていた。

次郎衛門がエルクウの力にこだわる理由は幾つかある。

まず、その力を与えてくれたのは、他でもないエディフェルであると言うこと。リネットと子をなした今でも、次郎衛門の心の中には彼女の姿が焼き付いており、その

エディフェルとの接点とも言えるこの力を、おいそれと捨てるわけには行かなかったのだ。次なる理由はダリエリの最期の言葉。

リネットの協力を得て、ダリエリらエルクウ一族ごと滅ぼしたはずだったが、ダリエリは最期にこう告げたのだ。

“憎しや、リネット。”

恨めしや、次郎衛門。

我等はこの仮初めの肉体を失っても、いつか必ずお前たちに復讐するだろう。

もし、お前たちがすでに滅んでいいるならば、お前たちの子々孫々すべてを滅ぼしてくれよう。

その後は、ゆっくりと狩りを楽しむとしよう。

我等は狩猟者で、お前たちは至上の獲物となるのだ。

覚えておくがいい、次郎衛門よ、リネットよ。

我等は必ず復讐を成し遂げるだろう”

ダリエリの呪詛ともとれるこの言葉は、次郎衛門とリネットにとって、十分脅威となった。何故なら、彼等はその後ヨークごと隠れてしまい、そのヨークに対するリネットの呼びかけも届くことはなかったからだ。

ヨークの機能は元々不完全な状態であり、新たに肉体を作り出すことも不可能なはずだった。しかし、次郎衛門たちには、その疑念を振り払うだけの材料を見出せなかった。

かくして、次郎衛門は誓うのだ。

何があっても、リネットだけは守り抜く、と。そうすることが、残された自分に出来る
せてもの償いだと思っただ。

次郎衛門にとって、もっとも大事な存在であるエディフェル。彼女を守れなかったこと
は、未だに次郎衛門を深い後悔の谷へと突き落としてしまう。だからこそ、エディフェル
の妹だけでも守ってやらねばいけない。いや、次郎衛門にとってはリネットとの子どもで
あっても、それはエディフェルの忘れ形見に等しい。それをむざむざとエルクウどもに殺
させはしない。そのためには、いかなる犠牲をもいとわぬ決意をしたのだった。

そして、それにはまず自分たちが強い力を維持しなくてはならない。更に、強い力即ち
エルクウの能力を高い状態で、子々孫々に受け継がなくてはいけないのだ。

その点では長男は次郎衛門の期待以上の能力を見せていた。その反面次男は肉体的能力
よりも感応力に優れていると言う程度で、肉体的能力からすれば、随分と見劣りする。

高い能力を持った子供がより多く欲しいのが次郎衛門の希望だが、何故かリネットとの
間には子供が出来にくいらしく、また、出来ても無事に産まれてくることが少なかった。
そんな中で、この二人の息子は無事に育ってくれているのだから、これ以上を望むのは無理
かも知れないが、どこか収まりがつかない。

そんなやるせない思いを抱いていたので、余計に次男にはつらくあたりがちになつてい
た。

次郎衛門の気持ちは、リネットも息子たちも十分すぎるほど分かっていた。だから、長
男も次男も次郎衛門の期待に応えるべく、努力はしていたのだ。ただ、次男はどうしても
長男に大きく水をあけられてしまっていた。

『鬼哭』

リネットから相談された翌日。

次郎衛門は次男を連れ立って山へと向かった。目的は次男の鍛練にあったのだが、その道行きで次男は意を決したように父に尋ねるのだった。

兄の様子にどこか変なところはないか、と。

何故そんなことを突然言い出したのかを追求すると、次男は最近変な夢を見ると言う。

自分が兄になって、若い女を犯し、あるいは殺してしまう夢を。

次郎衛門はそんな夢を見るのは、自分がそうありたいと言う気持ちであるに違いないと決め付け、次男を一層叱咤するだけで、それ以上次男の話を真剣に聞こうとはしなかった。

『鬼哭』

三、亡霊

『夜な夜な鬼がさまよい、人を食らう』

そんな噂が流れたのは、次男が妙な夢のことを父親に話した数日後のこと。

次郎衛門の住み処は村の一番はずれにあり、特に用がない限りは村人との交流を避けていたのだが、その日は村の民家に山での獲物を届けに来ていた。

次郎衛門がその女房に数羽の鳥を渡し、早々に帰ろうとしたところ、女房は不安げにその話をしてくれた。

ただ、まだ実際に食われた者はいないらしく、要は恐ろしい姿をした何かを森の中で見た、と言ふことらしい。

鬼なんているものなのかと、女房は笑い飛ばしてしまうが、次郎衛門の心中は穏やかではなかった。

彼等が徘徊してるのか？

だとしたら、その数は？

自分と長男だけで戦えるのか？

：取り止めもない考えが、次郎衛門の頭に渦巻いてくる。所詮は確証も何もない噂にすぎないのだと、自分自身に言い聞かせようとするが、それは叶わなかった。

その女房との世間話もそこそこに、次郎衛門は急いで自分の住み処へと帰って行った。リネットのことが気がかりだったからで、知らず知らずのうちにその歩みは早足から疾走へと変わっていた。

次郎衛門が自分の住み処に戻ると、そこはいつもと変わらぬ様子だった。

『鬼哭』

エルクウの特性なのか、母親となった今でもそこはかどなく少女らしさを残した妻。そして、いつも母親のそばに居るおとなしい次男。

二人は突然帰ってきた次郎衛門にそれぞれが尋ねた。

リネットは不安そうな表情で、口を動かさずに。次男は「どうかしたの」と口に出して。だが、それに対する答えは次郎衛門にはない。短く「何でもないと告げると、それきり黙ってしまった。何の確証もないまま、いたずらに不安をかきたてるのはよくない。そう思つての行動だったが、それをリネットに隠すのは叶わなかった。

リネットは次郎衛門の思考を直接感じ取れるのである。これはエルクウの特性とも言えるもので、それを防ぐ手だてはただ一つ。次郎衛門が真剣に心を閉ざすことだけだ。

次郎衛門の中にある暗雲の部分を感じ取ったリネットは、それが尋常ではないことを容易に察し、心配そうな表情で次郎衛門の腕に手を回してくる。

「…心配はいらん。奴等は俺が必ず仕留める」

意思伝達ではなく、思ったことをそのまま口に出す次郎衛門と、ほとんどを意思伝達で伝えるリネットの会話は、知らぬ者が見れば妙な光景に取れるだろう。片方のみが喋っているようで、ちゃんと会話が成り立っているのだから。

不安そうな表情のまま、リネットはそつと次郎衛門の背中にその小さな体を寄せる。

リネットには分かっているのだ。

未だに次郎衛門の心の中に姉の姿が焼き付いていることを。そして、それは自分では消せないことも。夜中に姉の夢を見てうなされる夫に気づき、癒すことも叶わぬ自分の無力さも。

『鬼哭』

だからこそ、リネットはこうして次郎衛門を、愛する夫をその小さな身体で抱きしめる。まるで、母が子を抱くように。

そんな父母を見つめる次男もまた一つの思いを深めるのだ。強い父、優しい母、そして強く優しい兄に囲まれる自分は幸せなのだ。

しばらく二人はそのまま動かなかったが、ややあつて次郎衛門が静かに立ち上がり「山の方を見てくる」と言い、住み処を後にした。

もし彼等が本当に現れているなら、エルクウとしての肉体的能力がリネットや次男よりも高い自分や長男の方を先に狙うだろう。感覚的にやや劣る自分たちはエルクウの気配を完全に隠すことも、早く察知することもできないのだ。となれば、なるべくリネットたちのそばにいない方がいい。リネットは感覚に優れているので、彼等が来てもいち早く察知し逃げることも可能だ。

それに、なまじ戦闘能力に劣る者がいると、彼等との乱戦になった場合に弱点となりかねない。わざわざこちらから弱点を露呈する必要はないのだ。

次郎衛門が山を歩いてみると、ふと独特の気配を感じた。恐らくそれは血を分けた者にしか感じ取れない気配——長男が近くにいる。

次郎衛門が呼びかけると、目の前に長男が現れた。聞くと、噂の事が気になり、山々を見て回っていたと言う。また、長男はしばらく一人で山小屋で暮らようになりたいと次郎衛門に申し出た。次郎衛門は長男の力であれば、十分にエルクウどもと拮抗し得ることを分かっていたので、長男の申し出を許した。何かがあればすぐに戻って来るように言い聞かせた上ではあるが、こうしておけばもし自分がやられても、長男が残る。また、その逆も

『鬼哭』

然りであるので、都合がいい。その後、しばらく山中を二人で歩いてから、次郎衛門と長男は二手に別れていった。

数日の後、噂は単なる噂ではなくなった。

山に入った娘が無残な姿をさらすことになり、その有り様はまさに鬼のなせる業としか言いようがなかったのだ。着物は裂かれ、白い肉体は赤く染まり、腕は引き千切られていた。

次郎衛門は焦りを感じ始めていた。これまで幾度となく山を探索したが、そのような物がある気配などまるで感じてなかった。これは長男も同じだった。ただ、次男だけは何やら感じ取っている様子だったが、何が気になるのかよく分からないと言う状況である。

ダリエリの亡霊か？ あるいは別のエルクウか？ それにしても、エルクウの行動形態からすると、今回のようなことはあまり考えられないとリネットは夫に告げる。若い女をむやみに殺すよりも、繁殖する方が数の減った彼らには大事なことであるはずだと。その点については次郎衛門も妻の言う通りとは思うのだが、女を襲った事実と言い、その筋力と言い、エルクウ以外には考えられない。だが、エルクウが無差別に殺しているのかと言われれば、村にまで下りて来ない点が府に落ちない。

どこかに漠然とした不安を抱きながらも、確たる証拠も見出せないまま、いたずらに時間だけが過ぎて行った。

次郎衛門がいつものように周囲の気配に注意しながら、山で狩りしていると、ふとどこからか強烈な殺気を感じ取った。優れた剣客であれば、それを容易に察知したであろうほどの強い殺気。明らかにそれは獣が放つものではない。人かあるいはそれに似たよう

『鬼哭』

なものであるはずだ。

これは件の鬼に違いない。次郎衛門はそう確信して、その殺気を強く感じた方へと向かった。そして、近づくにつれ、次郎衛門は殺気以外のものも感じ取るのだった。

血の匂いと生き物の断末魔の戦慄。そして、歓喜。

そいつは喜んでいた。断末魔の魂魄をもてあそぶことを。血をすすめることを。

次郎衛門は一層足を早めたが、彼が見たのはずっと消え去る何者かの影だけだった。そして、その影が去った後には、先ほどから感じていたものを肯定するだけのものが置き去りにされていた。

恐らくは若い女だろう。すでに見る影もなく引き千切られている四肢の間にわずかに着物が見える。胸元は大きくえぐりとられており、かつてそこにあっただであろう豊かな膨らみはない。

その時次郎衛門は確信した。これはエルクウの仕業であると。ほんの一瞬ではあったが、ここから消え去る影は明らかに鬼の形であった。それに、この女の胸をえぐりつつた爪は、エルクウのそれに間違いない。

つまり、自分たち以外にもエルクウが存在するのである。そして恐らくそいつは己の欲望のままに狩りをし続けるであろう。あるいは、自分たちを狙ってるのかも知れぬ。こうして無関係な人々を殺すのは、自分たちなどいつでも殺せると言う一種の脅しなのかも知れぬ。

それならば、受けて立つしかあるまい。そのための力であり、命なのだ。いまさら自分の命を惜しいとは思わない。ただ、後顧の憂いは断たねばならぬ。たとえ相手が亡霊で

『鬼哭』

あったとしても。

四、鬼の力

山で惨劇を目にしてからと言うもの、鬼の動きは急激に活発になって行つた。

それまでは何かの所用で山道に入った者だけが襲われていたのだが、ここに来ては時折村で人が消えたりするようになってきた。

人々は怯え、誰も山に入ろうとはしなかった。ただ一人次郎衛門を除いては。村人もそんな豪気な次郎衛門に一縷の望を託しつつ、相手が鬼では狩りの名人である次郎衛門も叶うまいとあきらめの色も隠せなかった。

村人に特別の恩義はないが、無辜の者が殺されるのを黙って見過ごす訳にも行かない。

だが、かつての鬼退治のような仰々しい討伐隊を期待できるものではなく、仮にあったとしてもエルクウに叶う術もなく返り討ちにあうのが関の山である。

かつて鬼退治をした時、エルクウたちを滅ぼした後、次郎衛門は剣客としての自分を捨てた。鬼としての自分も捨てたつもりだった。そのつもりで、寺の住職にすべてのいきさつを話し、それまで使っていた刀と己の角を切つたのだ。

次郎衛門の話すことをすべて理解していたかどうかは分からぬが、住職は二つを受け取り、他言無用とすることを誓ってくれた。

だが、角を切つたところで、エルクウの力が消えるわけではなかった。角はあくまでも外見的特徴に過ぎず、内在する力には何も関係なかったのである。

次郎衛門自身も、エディフェルの命を奪つた自分のこの力を否定することも出来ずにいた。つまり、力を捨てると言うことは、次郎衛門には到底出来ない相談だったのだ。

犠牲者の数が片手で収まらなくなった頃、次郎衛門はかつて刀を預けた寺へと赴いた。

『鬼哭』

住職も次郎衛門が来ることを分かっていたらしく、次郎衛門が来るや否や、その前に刀と角を入れた箱を差し出した。

「鬼……。お主も二度鬼ふたたびとなるか」

「それが宿命」

「宿命か。それは新たな宿命を生むだけやも知れぬ」

「それもまた宿命」

「子々孫々に宿命を負わせるか、次郎衛門」

「致し方ない」

「鬼とは、かくも恐ろしいものか。お主はそれで後悔せぬか」

「せぬ」

「…死に場に向かうか、次郎衛門よ」

「鬼の行き場も死に場も地獄の他ならぬ」

「それではこの坊主が言うことは何もない。行くがいい、次郎衛門よ」

エルクウの力が角に依存してないことは、次郎衛門も住職も知っていた。ゆえに本来はこのようなやり取りは無意味である。だが、次郎衛門は自らのけじめを付けるために、そして何よりも後事を住職に委ねるために必要だったのだ。

「お主がここを去った後、この坊主めはお主の子孫のために木を植えよう。そして、その木をお主の子々孫々に継いで行こうではないか。そして、その木がある限り、絶えることのないように祈ろうではないか」

こうして住職は一本の柏の木を植えた。後の柏木の家名の由来でもある。

『鬼哭』

寺を出た次郎衛門は、そのまま妻のもとへと帰る。長男は先日來、山小屋で寝泊まりしてゐるので住み処にはおらず、次郎衛門を迎えたのは妻と次男の二人だった。

次郎衛門が手にしている刀を見て、次男はただならぬ雰囲気を感じ取ったのか、心配そうな表情であつた。そして、リネットも。しかし、次郎衛門は口数少なな「自分に何かあつたら、寺を頼るがよい」とだけ告げて、自分のものであつた角を取り出してリネットに渡した。

リネットはその時珍しく言葉にして次郎衛門に問うた。「何故このようなことをするのですか」と。だが、次郎衛門はそれに答えなかつた。そればかりか深く心を閉ざしてしまひ、リネットの感応力をもつてしても次郎衛門の真意を覗き見ることは叶わなかつた。

五、もう一人の鬼

その日から次郎衛門はずっと山にこもっていた。いつ何時エルクウが姿を現すかも知れない中で住み処にこもる意味はない。また、村人も恐れて山には入らなくなったので、余計な心配がなければましと言える。

だが、一向に鬼の姿を見ないのだ。被害がなくなつたと言う訳ではない。

まるで裏をかかれているように次郎衛門が山にいれば村で、村にいれば別の山道で誰かが犠牲になつていた。初めのうちは単なる偶然だろうと思つていたが、それにしても納得が行かないのだ。

次郎衛門は自分のエルクウの力を少なからず自負していた。リネットの助けがあつたとは言え、かのエルクウどもを一掃したのは自分の力が勝つていたに他ならないと。だが、今の自分はどうかであろうか。相手の姿を捉えることもあたわず、ただ犠牲者が増えるのみではないか。

今自分が相手にしようとする奴は、自分よりもはるかに強くその上感覚的にも優れていると言うのか。もし本当にそうであつたら、恐らく自分は死地に向かつているだけだろう。しかし、そう思つたところで次郎衛門に選択の余地はない。死地にいるのであれば、相手もそこに引きずり込み、共に果てるしかない。それさえも叶わぬなら、後のことを長男に任すしかあるまい。いくら自分が及ばぬとて、無為に殺されはしない。

次郎衛門が払いきれぬ不安を胸に山中を彷徨していると、天も次郎衛門の心に倣うように暗雲を敷き詰め、やがて勢いよく雨が降り出した。瀧のような激しい雨に打たれながら、次郎衛門は天を仰ぎ見ては、己の不安を打ち消そうと試みた。だが、天は一層激しく打ち

付けるのみで、何も答えてはくれなかった。

その時だった。

両音に混じって、何かの息遣いが次郎衛門の耳に入った。

獣のような息遣い。だが、それは獣のものとは少し違うようで、近くにいます。それもごく近くに。その息遣いの主は、徐々に殺気を放ち始めていた。自分の毛が逆立つのが分かる。

奴か。いや、奴に違いない。次郎衛門は確信し、己の気を研ぎ澄まして、相手の位置と距離を測る。そして、同時に徐々に力を出して行く。

相手が自分を狙っているのは明らかだった。すでに相手の位置も距離も分かっている。後はお互いが動きだす一瞬を見極めるだけだ。

激しい雨の中、次郎衛門も相手もじつと相手の動きを見ていた。この状態から遣り合うとすれば、それは一瞬の交錯である。そして、その一瞬は落雷によりもたらされた。

轟音と共に付近の大木に強い光が降りかかる。と同時に、二つの影が跳ねた。森の木々に邪魔されることなく、それらは互いに向かい合っていた。

一つは次郎衛門。もう一つは紛れもなく鬼の姿をしていた。

落雷を受けた大木が裂けて火を放つよりも早く、二つの影は衝突した。次郎衛門は刀で、もう一人の鬼は大きな爪で、互いの身体に迫る。だが、互いの武器が相殺され、次郎衛門の斬撃は相手の腕をかすり、相手の爪は次郎衛門の肩をかすただけだった。

次郎衛門が二撃を与えようとすぐに振り返ったが、相手はそのまま飛び去ったらしく、付近からは殺気が消えていた。

『鬼哭』

逃げたのか、あるいは自分が命拾いしたのか。いずれにしろ、鬼——エルクウがいたことは確かである。そして、それに対抗するに刀では役不足であることも確認できた。何故なら相手の爪は次郎衛門の肩にわずかながらも食い込んでいるからだ。自分の斬撃は触つた程度にしかならなかったにも関わらず。

その後、次郎衛門はその場を後にしたが、ふと気になることがあった。

緊張していたせいか、鬼と対峙していた時には気が付かなかったのだが、どこかで感じた気配があった。それは自分の受けた傷からか、あるいは先ほどの一瞬の中からか。

その気配とは、紛れもなくかつて感じた、自分の血を分けた者——長男のものだった。

六、鬼のなせる業

思い返せば、予兆はあったのだ。

次男が以前に言っていたではないか、「長男におかしなところがないか」と。そして自分自身も漠然とした不安をずっと感じていたではないか。

だが、何故長男があのようなことをするのか、その理由が分からない。正気ではないのかも知れぬ。そうだとしたら、どうして正気を失ったのか。考えては止まり、止まっては考えるが、一向に結論が出てくる兆しはなかった。

もしかしたらリネットや次男なら、何か感じているかも知れない。ようやくその結論に至り、次郎衛門は住み処へと戻った。だが、何と言えはいいのか。

長男が鬼になり人々を殺すなどと誰が信じようか。次郎衛門自身もまだ信じられない状態であるのに、妙な疑心はかえって人の心に暗鬼を生み出すだけだ。

自分はどうすればいいのか。もはや悩んだところで答えが得られる術はない。

結局次郎衛門は何も言い出せなかった。妻にも、次男にも。ただ、その時次男はそんな父親の気持ちを感じたのか、次郎衛門に短く告げた。「母は自分が守る」と。

リネットは夫と息子のただならぬやり取りに、今までにない不安を感じていた。何か起きていて。それも自分たちに極めて関係の深い事柄が。そして、それは夫をひどく苦しめている——これがリネットに分かったすべてだった。

手助けをしようにも、夫はそれが何なのかを明かそうとはしない。意思を感じようにも、すっかり閉ざしているの、それもままならない。ただ、夫が一人で悩み苦しむ姿を見るだけの自分に苛立ちを、すべてを抱えてしまっている夫に切なさや愛しさを感じるだけだ

けだった。

そして、リネットはいつもそうするように、その夜も小さな身体を大きな次郎衛門の背中に寄せて、夫を抱きしめる。夫の苦しみを少しでも癒そうと、優しく暖かく包み込むように。

しばらくの間、次郎衛門はリネットの抱擁に身を任せていたが、不意に口を開いた。

「…鬼は俺自身なのかも知れん」

突然の言葉にリネットは一瞬身体を離しかけたが、次郎衛門の手がリネットの手に重なり、それを許さない。

「今俺が何を考えているか、お前には分かるだろう」

次郎衛門の言葉どおり、不意にリネットに次郎衛門の意思が伝わる。次郎衛門が心を閉ざすのをやめたのだ。が、リネットがそれを感じた途端、リネットは次郎衛門の身体から飛びのくように離れてしまった。握っていた次郎衛門の手を振りほどいて。

リネットが感じた光景とは、長男を殺す次郎衛門の姿だった。しかもそれは次郎衛門と言うよりは、一人の鬼の姿であった。

その光景に怯えるリネット。だが、夫がそんなことを考える理由もリネットに伝わって行った。無残に殺される若い娘と、それを歓喜をもってする鬼の姿。その鬼はやがて一人の若者に姿を変える。非常によく見知った若者に。

「どうしてこうなったのか、今の俺にはさっぱり分からん。だが、これ以上無辜の者を犠牲にする訳にも行かん。だから…」

その先を次郎衛門は言えなかった。だが、次郎衛門の決意はリネットにも次男にも伝

『鬼哭』

わった。リネットは涙をもってそれに答え、次男はただ押し黙り時折小さく頷くことで。

親が子を殺すなど、それこそ鬼のような所業ではないか。食い扶持に困る訳でもなければ、生まれつきの不具者でもない。それでなお殺さねばならない理由がどこにあるだろう。ただでさえリネットとの間には子が出来にくいと言うのに、五体満足に育った息子を何故に殺さねばならないのだろう。人の親であれば誰もそう感じるだろう。だからこそ、次郎衛門は鬼にならなければいけないのだ。

理由はどうあれ、長男が殺戮をしているのは疑いようのない事実である。となれば、それを止めるのは親としての務め。

「奴が鬼となった以上、俺も鬼になる。…いや、すでに俺の心は鬼と化しているのだろうな」

小さく笑った後、次郎衛門はリネットを抱き寄せ、しばらくそのままじっとしていた。

もはや止められないのだ。リネットも次郎衛門の背中に手を回し、負けじと次郎衛門を抱きしめた。

しばらくしてから、次郎衛門は次男をそばに置き、じっと次男の目を見つめる。言葉はなく、ただじっとお互いに見つめるだけである。

長男と違い力のあることがない次男には、何かあった時の戦力としては期待出来るものではない。だが、それでも、万が一にはすべてを賭して守らねばならない存在がいる。それが母、リネットである。もし次郎衛門が負けることになれば、残るは次男だけだ。その点で不安は尽きないが、次男はそんな次郎衛門の無言の問い掛けに対して、今まで見せたことのないほどの強い意思をもって答えた。その時、次郎衛門は次男の中に、長男以上の

『鬼哭』

意思の力と言うものを感じた。

次の夜。

次郎衛門は住み処を後にした。ここを出てからは鬼を――長男を殺してももはや戻ることはないだろうと言う思いを秘めて。

折しも、月が明るい夜であった。

七、鬼と、鬼になり切れぬ者

月明かりの下では死闘が繰り広げられていた。

一方は次郎衛門と名乗っていた鬼。もう一方のその息子であった鬼。

互いに最初の一撃をかわし、また攻撃の機会を伺っている。

老いたりと言えども次郎衛門の力は凄まじい。また、相手が引けば無理のない程度に押し、相手が押せばそれを無理なく受け流すと言う駆け引きで若者を引き離していた。

対する長男は有り余る精力の限りを尽くしていた。また次郎衛門に及ばずながらも駆け引きについては、他の誰でもない次郎衛門に教えられた身である。戦いが長丁場になればなるほど、次郎衛門には不利となるのは分かっていた。

次郎衛門にも、そして、長男にも。そして、実際に二人の死闘は長丁場の装いを見せていたのだ。

互いに遣り合ったことが一度ならずあるので、間合いもおおむね身にしみているし、手の内も知っているのだから、決め手を欠くのは必定である。

次郎衛門が緩急つけた攻撃を繰り出そうと相手の懐に飛び込めば、長男は勢いに逆らうことなく、小さな攻撃には小さな受けて、大きな攻撃には大きな受けて流してしまう。

だが、確実に次郎衛門の方が押されつつあった。と言うのも、このまま長丁場を演じてしまつては、いずれ自分の方が先に精が尽きる。だが下手な小細工は通じない。どうにかして隙を作り、一気に片をつけないことには行けないのだ。

だが、長男の方は次郎衛門の精が果てるまで粘ろうなどと考えている訳ではなかった。単にこれまでで最高の興奮をもたらしてくれる相手と存分に楽しみたいと感じていただけ

だった。自分と同じような鬼の姿をしたものを狩るなど滅多にない機会に違いない。これまでは非常にひよわな生き物をいたぶるだけでしかなかったのに、今は最高の快楽を感じている。

どうしても片をつけねばならない次郎衛門と、心行くまで最高の快楽を楽しもうとしていた長男とでは、戦う前からどちらが勝つか明らかだったのかも知れない。

次郎衛門は焦っていた。

何度めの攻撃の後、長男の体勢がわずかに崩れていたのを、好機ととらえて次郎衛門は一気に片をつけようと考えた。

一際強く地を蹴り、長男の胸元にすつと入り込み、後は大きな爪をその胸元に突き刺すだけだった。

だが、突き刺すほんの一瞬の前に、次郎衛門の脳裏に去来する光景があった。何故ならその瞬間だけ、長男の表情が鬼のそれではなく、普段の表情に戻っていたから。そして、その結果次郎衛門はほんのわずかな間、爪を繰り出すのをためらった。

……しまった。

そう感じた時はすでに手後れであった。鬼が不敵な笑みを浮かべ、もう一人のすでに鬼でなくなった者に、その大きな爪を振り下ろした。

最後の最後で自分は鬼になり切れなかった。自らの未熟さと長男の手管に見事にしてやられた悔しさと言うよりも、次郎衛門はどこかで安堵を感じていた。鬼になるはずだった自分は鬼になれぬまま、息子の手によって殺されようというのだ。息子の強さに惚れ惚れとし、自分が鬼でなかったことに安堵し、死ぬると言うのも悪くはない。

『鬼哭』

エルクウとの戦いの末に得たりネットとの生活は、真なる安らぎをもたらしてはくれなかった。だが、今こうして死ぬる自分の姿はどうであろうか。これ以上はないほどに安らいでいるではないか。そうだ、そうなのだ。これであの娘に会えるではないか。いつの日か必ず会おうと約束した、エディフェルト。

こうして、鬼と鬼でないものの死闘は幕を閉じた。

だが、鬼は満足していなかった。こんな風に簡単にこの相手が引つかかるとは思っていなかったのだ。その苛立ちを、それまでの遊び相手に散々ぶつけた後、鬼は遊び相手の残った部分の一つを抱えて、死闘が展開された場から姿を消した。

その場には、かつて次郎衛門と名乗った剣客の亡骸が打ち捨てられているだけだった。

その死に様が果たして次郎衛門にとって安らかであったかどうかは分からない。何故なら、そこに次郎衛門の頭はなかったから。

八、兄と弟

かつて次郎衛門は次男は自分よりも母親に近いと思っていた。だが、次男にとつては母親よりも近い者がいたのだ。見た目の能力は明らかに違うが、次男の奥底に秘めた意思の強さは長男を凌ぐやも知れぬとさえ感じた時、次男にあつて長男にない物が何であるかをおぼろげに感じた。恐らくは本当の意味で次郎衛門に近いのは、誰でもない次男だったのだ。ただ、それを本人に告げることはなかったし、また金輪際叶わぬこととなつてしまった。

次郎衛門が住み処を出た後、次男はずっと考えていた。今まで自分が見ていた夢のことを。一度は父に相談したが、相手にされなかつた話である。だが、その時はまだ本当のことを言つてなかつただけで、本当のことを真剣に父に話していれば、あるいは今のようなことにはならなかつたかも知れないと。

次男が隠していたのは、時折兄の中に見えた鬼の姿のことだった。その鬼はひどく狂暴な様子で、それを必死で押さえてる兄の姿があつた。

夢かも知れない。幻かも知れない。だが、それは兄と話していたり、ふと兄の方を見た時に、直接自分の頭の中に届くのだ。そして、その時の兄の様子はいつもの強く優しい姿ではなく、弱々しく涙を流しながら「助けて」と言つてるのだつた。

その姿を見るにつけ、気になつていた。だが、どうすればいいのか、自分には分からなかつた。自分は兄よりも力は弱く、感じることは出来ても助ける術は知り得ない。このことをそのまま言えば、母は心配するだろう。普段から父のことを気に掛けている母に、これ以上心配を掛けたくはない。そう思つてひたすら隠していた。

『鬼哭』

次郎衛門が出掛けた後、リネットはじつと座して帰りを待っていた。次男がいくら言っても、横になろうともせず、ただずつと分かつていたのだ。

次郎衛門が出て行った時に、もうそれきりであるかも知れぬと言うことを。長男を殺したところで、もうここに戻ってくるつもりはないであろうことも。

そして、夜が明け始めた頃、それは突然にやってきた。

戸を叩く音と人の気配。

次男はその時、今まで以上に緊張していた。その戸の向こう側にいる者が何であるかをリネットよりも正確に、素早く感じ取っていたのである。

そして、次男の中で何かが動き始めた。明確な意思をもったそれは、次男に激しく告げる。「戸を開けてはいけない」と。

だが、次男はじつと動かずにいた。自分の中の何かに揺り動かされることにためらいを感じ、あえてそれを押さえていた。何故なら、兄が鬼と化したのはこの自分の中に潜む何かのせいではないのかと感じていたから。

戸を叩く音は続く。

リネットは不安めいたものを感じながらも、かすかに夫の気配も感じとり、戸を開けるべく土間に下りる。

こうしてる間も次男の中では「駄目だ」と繰り返している。それが果たして鬼の本性的かどうか分からないまま、従う訳には行かず、次男は必死にこらえている。

そして、リネットが戸を開けて、闇の中に立つ姿が見えた時。

『鬼哭』

リネットはそれが愛する夫であることを望んだ。そして、それはある意味では叶えられた。

暗闇から出てきたのは、次郎衛門の首級を抱えた鬼だった。

それを見た時、リネットはすべてを察した。次郎衛門は自分の息子に殺されたのだと。

鬼は持っていた首級を土間に捨てるように放り、リネットを見て恍惚の笑みを浮かべた。それは、同族の雌性体を見ての笑みだったのだろう。それを感じたリネットはただ震えるばかりだった。愛する夫を愛する息子によって失った悲しみは計り知れない。やがて震えは絶叫に変わった。

その時、次男の緊張は最高に達していた。相変わらず自分の中の何かが盛んに動き出すとする。このままではいけないとは分かっていたが、力で兄を押しさえつけられる自信もなかったのだ。

だが、次男は不意に自分の目の前の鬼に、兄の姿を見た。よく見ていたような強く優しい兄ではなく、大きな獣に食いちぎられて、息も絶え絶えの状態の兄の姿だった。

幻か。そう思ったが、それが消えることはなかった。むしろ、獣の顎に挟まれた兄は何かを言おうとしているようだった。

次男はそれを必死に聞き取ろうと試みた。兄の口の動きを、弱々しい言葉を。そうしている間にも鬼は中に入り、絶叫した後、両手で顔をふさいでしまったリネットに近づきつつあった。

このままでは母が危ない。次男は直感的に強く感じたが、それでも兄の言葉が気になった。母と兄の様子を交互に見比べながら、ついに兄の言おうとしている言葉を聞き取ること

『鬼哭』

が出来た。

それは、

「俺を、殺せ」

だった。

その時、それまで止めていたものが一気に溢れ出した。

それは誰よりも、素早かった。

それは誰よりも、強かった。

次郎衛門よりも、長男よりも。

故に、誰よりも哀しかった。

次男の叫び声の中の一瞬の交錯。そして、すぐ後に鬼の哭声が続いたが、その声は悲しみに満ちていた。

リネットが顔を上げるとその目の前には、先ほど入ってきた鬼の胸に深々と大きな爪を突き刺したもう一人の鬼の姿があった。そして、不思議なことに、先ほど恍惚の笑みを浮かべた鬼も、突き刺してる鬼も、両の瞳から涙を流していたのである。

何が起きたのか、リネットにはにわかには理解できなかったが、ややあって、その鬼たちが自分の息子であることと、弟が兄を刺していることを理解した。

二人の鬼は先ほどから微動だにしなかった。すでにどちらの鬼からも、殺気は感じられない。

リネットは未だに動こうとしない二人の鬼——息子たちに近づき、二人をそつとその小さな身体で抱きしめた。次郎衛門にしていたように。そして、おぼつかない調子で、子ど

『鬼哭』

もが出来た頃に村人に教えてもらった子守歌を、口ずさむ。かつて二人の幼子を寝つかせた時のように。

いつしか、リネットの手の中には、二人の赤子の姿があったのかも知れない。そして、一人は二度と覚めることのない安らかな眠りに、一人は一時の安らぎの眠りに就いていった。

九、柏木の名を継ぐもの

その後、リネットたちは次郎衛門の言い付けに従い、すべてを知る住職のもとに身を寄せ、次郎衛門と長男を懇ろに弔った。

そして、次男は長男が何故あなつたのかをリネットと住職に打ち明けた。

鬼の力は必ずしも御し得るものではないと言うことを。そして、それに気づいた長男はどうにかしようとしたが、結局はそれに打ち勝てなかつたと言うことを。

「それでも鬼の力を継ぐか」

「宿命とは、かようなものなれば」

「ならば、その印として、柏木を名乗るがいい。もし、その力を捨てる時あらば、柏木の名も捨てよ」

この後、柏木と言う名を継いだ者は、過酷な宿命を背負うことになり、その歴史には多数の者の血と涙が流されることとなった。

直系男児には鬼を御し得ない者が多く、それらは皆人知れずの間に散華する。それでなお、柏木はその血を保って行かねばならなかつた。

何故なら鬼を駆逐できるのは、他ならぬ鬼しかないのだ。故に、柏木の名を継ぐ者は皆、鬼となつて行つたのである。

鬼の力どうこうと語るよりも、そのような所業を繰り返すこと自体がすでに鬼以外の何者ではないことを雄弁に語っているのだが、それはどちらが主であり従であるのか。

今となつては、誰も知り得ない。

『鬼哭』

後書き

『鬼哭』（きこく）

「痕」（リーフ・ビジュアルノベルシリーズ VOL.2）より

作品について

かなり前に思い立った話です。

事の始まりは小栗秀順さんとの電話の中で出てきた「柏木家の血の秘密」です。その話は彼の『夢の残滓』で見ることが出来ますが、基本的にはそれと同じような設定を（血の維持などに関してのみ）しています。

ただ、この話を書いた理由はもう一つありまして、それは「次郎衛門はろくな死に方をしないだろう」と言う独断とも言える自分の考えを自分なりに描いてみたかったからです。勿論リネットとの生活と言う面も非常に興味深い物です。

ですが、お読みいただければ分かる通り、この話は明るい物ではありません。『痕』が本来持っている暗い部分をより一層強調したような作品になっていると思います。果たしてそのような作品を書いて、自分が何を言いたいのかといわれると、難しいです。

「ただ自分なりの柏木家の血にまつわる話を書いてみたかっただけ」と言えばそれまでです。

そこにあるのは間違いない悲劇です。それを敢えて題材に選んだのは、そんな中でのリネットの強さや次郎衛門の脆さを描いてみたかったからかも知れません。

リネットの事

救いが無いとお思いの方も多いでしょう。でも、リネットは強いです。次郎衛門の妻であると言うよりは、次郎衛門にとっても母のような強さをもった存在だと私は思っています。ですから最後に彼女は二人の息子を抱きしめたのです。

母親の強さと言うのは「たとえ世界中を敵に回しても、我が子だけは守る」と言うくらいに凄絶さを、時に秘めています（と私は思っています）。また、リネットが強くなければ、どうして次郎衛門と一緒に暮らせるでしょうか。姉への想いを引きずり、今なお夢にうなされる夫の心を癒す事もままならない状態で、どうして一緒にいられるのでしょうか。

次郎衛門の事

確かに強いのですが、彼の強さはエディフェルへの想いを引き摺ってるあたりでその脆さを露呈しています。だから、彼は最期には鬼になり得なかった。そして、エディフェルと会える事に安らぎを見出していたのです。

角の事

伝えられている伝説では、「次郎衛門が角を切ると、神通力も失った」と言う事になっています。

ですが、それは所詮伝説に過ぎません。角を切る事で鬼の力を失うのであれば、それで鬼の力を捨てる事が出来たのなら、誰も苦しむ事はなかったのです。耕一の父親も、四

姉妹の両親も、そして柳川も。

コメント

この作品を書き始めたのは、掲示板が最初でした。あの時は真剣に書き上がるかどうか自信がなかったので、あえて「続きはない」と言っておきました。

ですが、何がどうなるかはさっぱり分からない物です。七月に入ってからふとこの作品にとりかかり、ここまで出来たと言う次第ですから。

今回の作品はこれまでとは、かなり趣向を変えているので、その辺で皆さんがどう感じられたか、お聞かせいただければ幸いです。

なお、今回執筆中のBGMは、ひたすら「見えざる敵」をループ再生しておりました。話がシリアスで暗い感じなので、この辺のBGMの雰囲気が一番合うようです。

追加コメント(1999/07/28)

書式統一の改訂です。

1997/07/05 初版 a s h

1997/07/12 改訂 a s h

1999/07/28 改訂 a s h

PDF書式変更:2016/05/12